

災害と人間の暮らし

—歴史と文化の固有の役割—

今津勝紀

一、災害からの復興と歴史・文化

史料ネットという活動があることをご存知だろうか。地震や水害などの災害で地域の歴史資料が失われることを少しでも防ごうという活動である。それがはじまったのは、一九九五年の阪神淡路大震災にまで遡る。

今でこそ、災害発生時にボランティアが活躍するのはよく見る光景になったが、一九九五年はボランティア元年とも呼ばれる。それまでの日本では市民のボランティア活動はあまり大きく取りあげられることもなかったが、阪神淡路大震災の惨状を見るに見かねた多くの市民が、自分の出来ることを手伝おうと動き出したのがこの年であった。筆者はその頃、神戸に居住しており、はじめて職を得た鳥取と神戸の間を行き来する生活をしていただが、見慣れた光景が一変し、そこに織り込まれていた人と人との関係が失われたことに、大きな衝撃を受けた。まさに、大切な人を突然亡くしたのと同様で、一瞬にして町を失ったことで、心にぽっかりと穴が空いたような状態になったのを覚えている。

このような大災害に際しては、莫大な公費が注ぎ込まれ、ライフラインの復旧を最優先として、ハード面の再建がものすごいスピードで進められる。これは当然のことなのだが、損壊、倒壊した家屋の撤去にともない、その家が伝えていたものなどが、どんどん捨てられてゆくことにもなる。また地下に遺構があることがわかっても生活再建が優先されるので、調査なしで工事するのもやむを得まいとする空気も広がっていた。そもそも調査員となるべき行政職員が災害対応で忙殺されている。このままでは、地域の歴史を伝えるものが何もなくなってしまわないか、この喪失感を補填し前を向いて歩みをすすめるには町の記憶と記録が不可欠ではないのか、そんな危機感を若手の歴史研究者たちが共有していった。そこで、被災した家屋を一軒一軒訪ね、生活の再建がなるまで一時的にお預かりします、必要ならば修復などもしますと、ピラを配り、呼びかけて回る活動をはじめた。これが史料ネットの原点である。

しかし、今から二五年前の活動は困難をきわめた。そもそもこうした広い意味での文化財についての社会的認知が低かった。被災した家々を回ってみると、そのようなものはないと、あしらわれるのが普通である。もちろん、その都度、お宝のような古文書ではなく、みなさんが大切にされている日々の生活の痕跡が大事ですので、そうしたものも残せるといいですね、などと説明はするのだが、理解を得るのは困難であった。また、今でこそ、こうした地域に残された人間の痕跡を地域歴史遺産などと呼称しているが、当時は文化財保護を主管する文化庁をはじめ都道府県、市町村の教育委員会でもそうした資料を保全することの必要性を認識していなかった。行政は文化財保護法で指定した文化財の保護、保全の義務を負うが、そこからはずれる未指定文化財の保護、保全は業務外であり、史料ネットがやろうとしていることには関知しない、むしろ無駄な仕事を持ち込むな、というのが基本スタンスであった。

とはいえ、本当の意味での復興ってどういうことだろう、私たちが、人間らしく暮らせる地域社会や町とはどのようなものだろう、と考えた際、これまでの歴史と文化を見つめ直し、未来を見据えることがやはり重要である。第二次世界大戦で日本が焦土と化し、敗戦後、新たな日本の再建が目指されるが、その際にも日本の歴史を見つめ直す運動が盛り上がりを見せた。これは国民的歴史学運動とも呼ばれたが、新たな日本をめぐる党派的な駆け引きに巻き込まれ、僅か数年で頓挫した。こうした政治運動はすぐに廃れたが、例えば、第二次世界大戦で焼け野原になった岡山城下で、岡山城天守閣の「再建」が目指されたのも同様の意味をもっていた。高度経済成長期に岡山城の天守閣は「再建」されるが、岡山という場を共有する人たちの「大切なもの」、シンボル、拠り所として天守閣が必要だったのだ。また、ほぼ同時期に『岡山市史』の編纂も実施されるが、これも過去を振り返ることで、自らの位置を確かめ、これから進む方向を再認識することであり、これらはいずれも市民の未来に向けての事業なのであった。

二、岡山史料ネットの運動

岡山県内で史料ネットの活動を最初に行ったのは、二〇〇〇年十月六日の鳥取県西部地震の時、新見市千屋地区で被害があった。その際、新見市役所に出向き、歴史資料の把握状況を伺い、ビラの配布などの協力を求めたが、理解を得るには至らなかった。また、現地のボランティアセンターなどでも交渉を重ねたが、これも理解を得られた形跡はない。その場で、解体家屋の片付け作業の過程で出てきた資料がいくつも見受けられたので、こうしたものも地域の歴史資料ですので残す手立てを考えましようと思えるのだが、通じなかった。

大規模災害以外にもさまざまな契機に地域の歴史資料は滅失しているが、日常的にも何かやることはあるのではないかと、これまで各地の史料ネットは、災害が起きてから動いてきたが、その前に何かできることはあるのではないかと、千屋での失敗は、地元との連携の欠如が大きな要因であったので、県内で多様なチャンネルなりネットワークを作っておくことが大切だと考えさせられた。そこで、大規模な災害に見舞われる前に、予防的に関係者のネットワークを作り、準備しておこうというのが岡山史料ネットの出発点である。こうして岡山史料ネットは、日本最初の予防型ネットとして成立する。

県内の関係者ととともに講演会やワークショップを開くようになったのが二〇〇五年からだが、なかなか実質的には機能しなかった。例えば、二〇〇九年八月に列島を襲った台風九号は、兵庫県佐用町などで死者・行方不明者二二名にのぼる被害をもたらした。隣接する岡山県美作市でも水害が発生する。特に美作市の江見・土居で被害が激しかったが、土居は、播磨から国境の峠を超えて美作に入った最初の出雲街道の宿場町であり、ここが濁流にのまれた。この時も地元の研究者とともに、市役所を訪れ歴史資料のレスキューへの協力をお願いするのだが、反応は芳しくなかった。

今回、二〇一八年七月六日の豪雨は西日本各地に大きな被害をもたらした。岡山県内でも



倉敷市立真備図書館の被災の様子

倉敷市・岡山市・総社市・高梁市ほか、各地で被害が発生し、岡山史料ネットもさまざまなレスキュー活動を行い、ようやく予防型から実践型へと移行するのだが、当初の想定通りに運ばなかったことも多くあった。しかし、事前にネット事業がスタートしていたことで、本学だけでなくノートルダム清心女子大学など近隣大学の協力もえられ、県・市の諸組織・機関とのスムーズな連携が実現したことなどは大きな成果である。これを執筆している一〇月現在では、緊急搬送したものを安定化させる作業へと移行しつつあるが、息の長い活動になるだろう。

一九九五年以降、日本各地で災害が頻発する中で、史料ネット運動は全国へと広がってゆき、今や全国の二四県で、概ね、それぞれの国立大学を中心として事務局が置かれ活動を行っている。現在、人間文化研究機構を中心にこれらの大学のネットワーク化が進められようとしているが、こうして全国に拡大していることには、何かより積極的な意味があるように思う。

断捨離という言葉があるが、これは何もかも捨ててしまおうというものではないだろう。つきつめると本当にいるもの、必要とするものの選択であり、「大切なもの」を見つめ直す行為にはほかならない。人は生きてゆく上で、拠り所とする「大切なもの」が誰にでもあるのだ。これは家や町、社会や民族、さらには人類にとっても同様であり、それぞれに大切なものがあるのだが、日本国や岡山県・岡山市といった大きな物語で代替するのではなく、人々の生活に寄り添って、歴史と文化を大切にしていこうというのが、史料ネット運動の本質的に重要な部分ではなかろうか。決して、歴史家による歴史家のための資料保存運動なのではない。史料ネット運動は、史料の救済・保全をきっかけとして、地域の歴史や文化を見つめ直す、生活者を主体とした新たな地域社会や町作りの運動であり、歴史家はほんの少しそのお手伝いをするだけである。

こうした文脈でこの問題を考えた際に、図書館が果たしうる役割は実に大きいものがある。図書館は設置主体の性格に応じて、それぞれ固有の役割があり、一様ではないが、知識や情報の集積といった基本機能は共通する。今回の災害で倉敷市真備図書館は壊滅的被害を受けたが、地域住民が必要とする知識・情報の集積体の「再建」が待たれるところである。それこそが、まさに復興のシンボルになるだろう。岡山大学附属図書館としても可能な限りの支援を行いたい。

(いまづ・かつのり 附属図書館館長)